

■ 平安時代の道具

弘田柵跡からは、役人が使った道具や兵士の武器、木簡など、柵で行われていた仕事に関する道具が発見されています。

特に木簡は、ほかの役所とのやりとりに使われた記録が書かれたもので、柵の歴史を知るうえで重要です。木簡の出土は古く、文部省による発掘調査以前に、地元の藤井東一^{ふじ い とういち}が、中国敦煌^{とんこう}出土の木簡に似ていることに気がついていました。日本で木簡研究が盛んになるのは、戦後、奈良県の平城京跡^{へいじょうきやう}の発掘調査が進んでからなので、弘田柵跡は、日本の木簡研究のさきがけとなった遺跡ともいえます。



鉄の矢じり



「小勝」と墨書された土器



木 簡



さまざまな土器(須恵器・土師器)



漆紙文書(赤外線写真)



秋田県マスコット
スギツチ

■ 弘田柵跡に関するお問い合わせは

●発掘調査に関すること

秋田県教育庁弘田柵跡調査事務所 〒014-0802 大仙市弘田字牛嶋20番地
tel.0187-69-2442 fax.0187-69-3330

●復元された史跡公園に関すること

大仙市教育委員会文化財保護課 〒014-0805 大仙市高梨字田茂木10番地
tel.0187-63-8972 fax.0187-63-8973

●その他現地での窓口、ボランティアガイドに関すること

大仙市弘田柵総合案内所(4月～11月) 〒014-0802 大仙市弘田字仲谷地95番地
tel.0187-69-2397 (fax兼)



弘田柵跡だより

平成24年3月31日

秋田県教育庁弘田柵跡調査事務所



弘田柵跡だよりは、発掘調査から明らかになった、いろいろな発見を、みなさんにお知らせするためのたよりです。今回は弘田柵跡のすがたや役割について、くわしく紹介します。



空から見た弘田柵跡(南から)



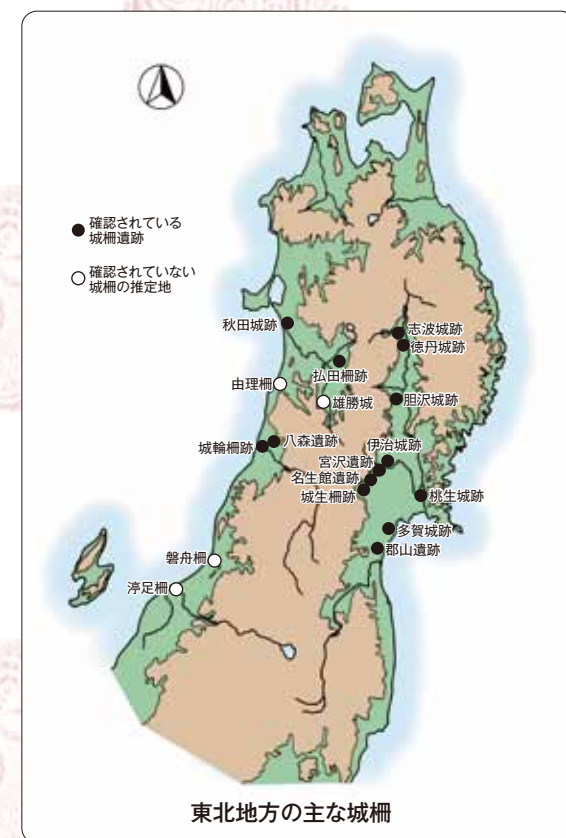
■ 弘田柵跡とは

ほったの さく あと
弘田柵跡は今から1200年ほど前、平安時代の初めにつくられた役所の跡です。

天皇を中心とする律令国家は、東北地方を治めるために、「城」や「柵」という政治と軍事の拠点になる役所を、東北地方につくりました。また、このころ東北地方に暮らしていた人たちは、「蝦夷」と呼ばれていました。

奈良時代以降、秋田県内には秋田城・雄勝城・由理柵^{おさ}などがつくられ、歴史書にも記録が残されています。しかし弘田柵にかかわる記録はなく、「弘田^{ほった}」という地名から名付けられた遺跡のため、「弘田柵跡」と呼ばれます。この弘田柵跡について、古代史や考古学の研究者からは、さまざまな学説が発表されています。

名 称	史跡 弘田柵跡
所 在 地	大仙市弘田、仙北郡美郷町本堂城回 地内
指定年月日	昭和6年3月30日 昭和63年6月29日(追加指定)
指 定 面 積	894,618.64㎡ (国土調査後は899,380.97㎡)
管 理 団 体	大仙市



東北地方の主な城柵



■ 弘田柵跡の発見

弘田柵跡は大仙市街地から東に6km、仙北平野の中央に位置し、真山・長森という2つの丘が島のように見えるところにあります。

今から100年ほど前の明治30年代に、水田の下から、柵（材木堀）に使われた角材が200本ほど見つかり、人々に知られるようになりました。地元出身の文筆家後藤宙外（寅之助）は、歴史書にある「城」や「柵」にあたる遺跡ではないかと、注目しました。

昭和5年に、文部省（当時）の上田三平が発掘調査し、翌年には史跡と認められて県内で初めて国から指定を受け、平安時代の秋田を代表する遺跡として、保護されることになりました。



水田の下から見つかった
四重の柵（昭和5年）



■ 弘田柵跡をまもる

昭和40年代に入ると、弘田柵跡の周辺でも大規模な耕地整理が計画されるようになりました。地元との協議の結果、史跡をまもり、実体を解明する調査が必要と考え、秋田県は昭和49年に弘田柵跡調査事務所を設置しました。現在まで百数十次にわたる学術調査が続けられています。

また地元の大仙市（旧仙北町）では、遺跡の重要な部分を買上げて公有化し、調査成果に基づいた史跡公園として、整備・活用を進めています。



史跡公園としての整備

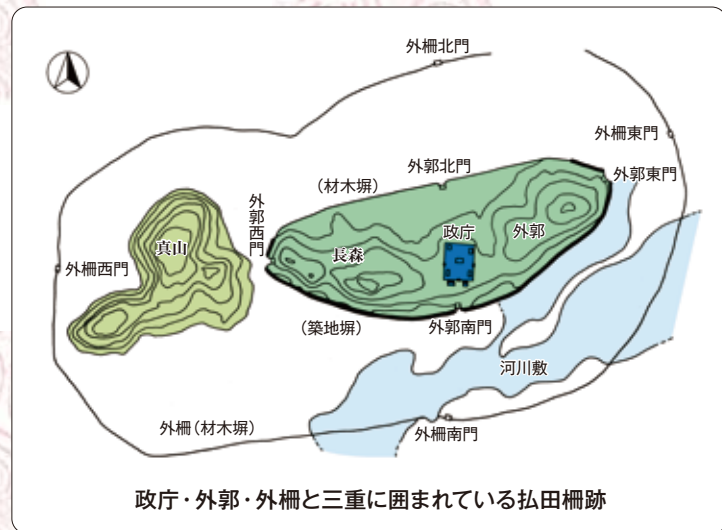


■ 弘田柵跡の大きさと形

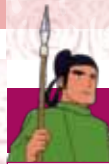
弘田柵跡の外周は「外柵」と呼ばれます。真山・長森を含んだ、東西1370m、南北780m、総延長3.6kmほどが材木堀で楕円形に囲まれています。長森の周囲は「外郭」と呼ばれます。東西765m、南北320m、総延長1.8kmほどが築地堀などで囲まれていました。また長森の中央に置かれた「政庁」も、板堀で囲まれていました。

弘田柵跡は、中心となる政庁、長森を囲む外郭、そして外周を囲む外柵の、三重に囲まれた形になっています。

政庁と外郭の外側が、外柵により三重に区画された形は、弘田柵跡の特徴のひとつです。



政庁・外郭・外柵と三重に囲まれている弘田柵跡



■ 三重の囲いと柵の中のような

9世紀初め、政庁は長森の中央をならしてつくられました。出入口には門があり、まわりは板堀で囲まれていました。政庁には、正殿や脇殿が整然と配置され、建物に囲まれた「コ」の字形の広場は、政治にかかわる儀式や蝦夷の人たちのもてなしも行われ、柵の中では最も重要な場所でした。



外郭南門に連なる石壁

外郭には土を突き固めてつくった、幅3mを超える丈夫な築地堀が巡らされ、北側の低い部分は材木堀となっていました。東西南北の四方に門があり、門の両脇には警備のための櫓もつくられていました。また正面玄関にあたる外郭南門の両脇は石壁と呼ばれる強固な石垣となっていて、その上にも大きな櫓がつけられていました。真山からはお墓なども見つかっています。

外柵も東西南北に門はありますが、櫓はつくられませんでした。また柵の内側には河川が取り込まれていて、材木堀の一部が開いた形となっていました。

9世紀の中頃になると外郭や外柵は修理が必要になり、外郭線は築地堀から材木堀につくりかえられました。しかし外柵は修理されることがなかったため、真山は囲いの外になってしまいました。



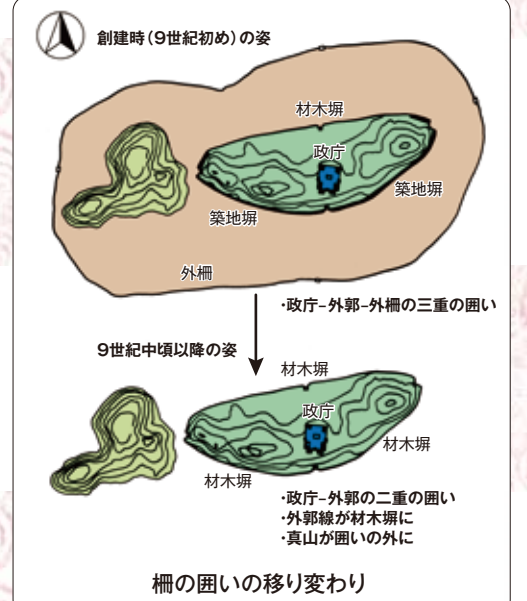
■ 弘田柵跡の時代

弘田柵跡では角材などの材木や、木簡をはじめとする木製品が、水田の下から地下水に浸かった状態で腐らずに見つかります。一番初めにつくられた、外柵と外郭北側の材木堀も、水田の下に根元が良く残っています。とくに外郭北側の材木堀は3回つくり直されたため、四重になって残っている部分も発見されています。これら角材の年輪を詳しく調べた結果、西暦801年頃に伐採されたことがわかり、弘田柵跡がつくられた時代が明らかになりました。



政庁と周辺の施設群

政庁の東側の高台にも多くの建物が建ち並び、さまざまな事務が行われた場所と考えられています。また西側の高台からは、北に面した斜面に鍛冶炉が重なって見つけられ、矢じりなどの鉄製品などをつくる工房が集中していました。



3回の改修により四重になった外郭材木堀